

教誨を掘り起こす

契沖による『万葉集』解説の一側面について

山口 智弘

はじめに

徳川時代の国学者本居宣長(1730-1801)の著述を通覧してゆくと、「契沖」の名にしばしば行き当たる。

近代難波ノ契沖師此道ノ学問ニ通ジ、スベテ古書ヲ引証シ、中古以来ノ妄説ヲヤブリ、数百年来ノ非ヲ正シ、『万葉』ヨリハジメ多クノ註解ヲナシテ、衆人ノ惑ヒヲトケリ。〔中略〕大カタ契沖ハ中興ノ歌学者トミエタリ。(本居宣長『排蘆小船』)

古学とは、すべて後世の説にかかはらず、何事も、古書によりて、その本を考へ、上代の事を、つまびらかに明らむる学問也。此学問、ちかき世に生まれり。契沖ほふし、歌書に限りてはあれど、此道すぢを開きそめたり。此人をぞ、此まなびのはじめの祖ともいひつべき。(本居宣長『宇比山踏』)

「中古以来ノ妄説」を破った「中興ノ歌学者」、そして、文献考証を重視する「古学」の「はじめの祖」、契沖(1640-1701)を讃えるこのような言葉を素直に受け取るならば、我々は契沖に恋々と私淑する宣長の姿を想起するであろう。ただし、聊か穿った見方をするならば、契沖を国学中興の祖に仕立て上げて己の学風をそこに結び付け、自身の学問に纏わり付く古文辞学と呼ばれた当時の流行儒学の影を払拭しようとする目論む宣長のしたたかな姿を、その言裏に捉えることは可能であるのかもしれない¹。

両引文に託された宣長の思惑としてどちらが妥当であるかを判断するのは容易ではない。しかし、これらの言葉が世に齎した影響として確かなことが二つある。第一には、宣長による一連の契沖顕彰が、没後久しく埋もれていた一学僧の名を世に広く知らしめたということである。当時、契沖の名前と業績を知る者は極めて稀であった²。そして第二には、後世における契

沖への評価は、宣長の提示した契沖像より概ね派生しているということである。宣長の言葉にもあるように、契沖は『万葉集』を始めとする和文献への注釈を多く遺したことから³、契沖の学問への接近は主に日本文学研究の領域でなされてきた。ドイツ近代文献学の成果を摂取して日本文学研究を行った芳賀矢一は、契沖注釈学の実証性に注目、日本近代文献学の先駆者と契沖を評し⁴、また、久松潜一は、芳賀の指摘した契沖学の特質を実証的に跡付け、特に、契沖の『万葉集』注釈を高く評価している⁵。つまり、宣長の言葉が素描した契沖の姿は、後代の契沖観の下絵として在り続けたのである。

近世国学の開祖、あるいは、日本近代文献学の先駆者 — 契沖に下されたこのような評価は もちろん彼の所業の一面を言い当てており、ここに筆者も異論はない。しかし、こうした評価では見落とされた側面が契沖の学問にはあるのではないかと、とは思ふ。古典文献による実証に基づいた客観的な注釈 — 注釈の性格がこのように特徴付けられたとき、そこに込められた注釈者の思想性は軽視され、その探究が鈍くなるのが時としてある⁶。しかし、注釈者自身が莫大な史料の海からごく一部の史料を取捨選択している以上、その意図を我々が突き止められるか否かはさて置くとしても、そこには注釈者の何らかの思惑が働いている。そのため、文献に基づいた中立的な考証であることを装ったとしても、そこに何らかの思想めいたものが存在する可能性を我々は完全に排除できない。にもかかわらず、その可能性については、これまで十分に検討されなかった⁷。

このような契沖研究の現状を鑑みるに、契沖の和文献注釈に関するこれまでの指摘とは別の趣向の有無について検討することは、彼の注釈の意義を更に開いていく上で有用であると思う。契沖による和書への注釈は多くあるが、『万葉集』研究の中で獲得された知見を敷衍したものが多くことから、差し当たり、『万葉集』との関わりを問題としたい。そこで、契沖による『万葉集』注釈書である『万葉代匠記』⁸を主に分析し、その注解の趣きについて再検討することで、和文献への注解の中に潜む契沖の思想を汲むための手掛かりを探ることを本論考の目的とする。

一 契沖の和歌観 — 中世歌学の継承

契沖の『万葉集』注解に立ち入る前に、彼が和歌全般をどのように捉えていたのかをまず最初に押さえておく。『万葉代匠記』の冒頭には惣釈が付されており、『万葉集』の書題についての考証がここでは行われている。書題の「万葉」とは何か — この問いに答える際に契沖がま

ず言及したのは、和歌の本質について述べられた『古今和歌集』仮名序の冒頭、「やまとうたは、ひとの心をたねとして、よろづのことの葉とぞなれりける」である。『古今和歌集』は「続万葉集」とも呼ばれる。契沖はこれに触れ、仮名序の一句を次のように解説することで、和歌に関する自身の見解を開陳している。

人の心、物に感ぜざるほどは、草木の種のつちの中にあるがごとし。既に感ずるに至りて、見る物聞ものにつけて、さまざまにいひいだせるは、雨露のめぐみにあひてもえ出て、葉のわかれたるがごとし。土にこまれるほどは、何のたねともしらざれども、柯葉をみて草木をわかち、木の中にも何の木、草の中にも何の草と、しるにたがはざるがごとく、言外にあらはれて後、心のほどもよくしられて、さかしきとおろかなると、まことあるといつはれると、かくすにところなし。このゆへに言の字は古登とよみてたれるを、古登波とよみ、ことのはともいふは、葉の字のたとひをそへていへるなり。〔中略〕言の中に精華なるを、もろこしには詩といひ、此国には哥といふ。(『万葉代匠記』惣釈 1/194)

「たね」による心の比喩を、契沖は次のように解しているのであろう。— 心の様態は、それを取り巻く対象への感応に先立っては捉えられない。対象との接触によって心が感応するとき、その感応が言葉として発せられる契機が生じる。心の感応が言語に仮託されて表出されることで、その智愚や真偽が露わとなる。そこでようやく、心の様態が自他に明らかになる — と。つまり、視聴覚を通じて把握された対象への心の感応が言語の形態を伴って発露されたものが言葉であり、その中でも特に洗練かつ華美なるものが、本朝では「哥」であり、唐土では「詩」である、と契沖はここで定義しているのである。

この契沖の言葉に従うならば、本朝の「哥」と唐土の「詩」とは、名辞を異にするとはいえ、知覚化された対象への感応が言語を通じて発露されたものという点で違いはない、ということになる。事実、「詩」と「哥」、和訓では共に「うた」と呼んで通じているのはそのためである⁹、と契沖は考えている。以上の点での和歌と漢詩との同質性は、中世以来の堂上歌学の主張するものであり、契沖の和歌観はそれを踏襲したものであったと言える。これは、契沖と同様に『万葉集』注解に挑みながらも、感情の素朴な発露を和歌の特権的性質と見做し、唐土の言語及び思想の流入に伴う心と言葉の変質によってそれが阻害されたと説く後の国学者賀茂真淵¹⁰とは

異なるのである。

二 『万葉集』と『毛詩』— 契沖による『万葉集』の位置付け

以上を踏まえた上で、契沖の『万葉集』注釈の趣きについて考えてみよう。ここで大きな問題となるのは、注釈対象である『万葉集』の性質を契沖がいかに見做していたのか、ということである。仮に、『万葉集』一書に関わる何らかの特質を契沖が明確に捉えていたとするならば、それが彼の『万葉集』注釈の趣きにも何らかの影響を与えた可能性があるからである。

『万葉集』注釈を水戸徳川家より委嘱された下河辺長流は、老衰によって注釈執筆の継続が困難であると自ら悟ったとき、その後継として契沖を光圀に推挙している。これに拠るならば、契沖の『万葉集』注釈への取り組みの直接の契機は全くの偶然によるものである¹¹。しかし、注釈執筆への本格着手以前に、契沖は早くから『万葉集』への強い関心を抱いており¹²、単なる委託事業として、典拠探しと語釈とに終始していたとも考えにくい。

契沖が『万葉集』にいかなる関心を抱いていたのか。これを探究するために、和歌に関する契沖の見解を更に尋ねよう。

まづ和哥は人ごとに胸中の俗塵を払ふ玉ははきなり。〔中略〕かの名をおとしても利を得ん事をむさぼり、身をそこなひても富を求むことをおもふともがらは、うかべる雲、胸の月をかくし、にごれる水、心の蓮をこえて、守銭の奴いとどまどろむことをえじ。たとひ儒教をならひ、釈典をまなべども、詩哥にたづさはらざる人は、胸中つゝに塵俗をはらはずして、君子の跡三千里を隔てをひがたく、開土の道、五百馭にさはりてつかれやすし。〔『万葉代匠記』惣釈 1/217-218〕

和歌は外物に対する感応が言語形態を伴って発露したものであり、心に堆積する俗塵の払底という作用がその発露にはある、と契沖は考えている。和歌漢詩同質論を踏まえつつも、共通項では括れぬ和歌の効用をも捉えているのである。こうした和歌観形成の背景には、若くして仏門に入り、生涯を真言宗の仏者として過ごした契沖のキャリアも、多分に影響を与えたのかもしれない。ただし、この俗塵の払底について、気になる点が二つある。第一には、俗塵の払底の重要性を説明する際に、「開土の道、五百馭にさはりてつかれやすし」とともに、「君子の跡

三千里を隔てをひがたく」とも述べ、君子を志向する修為が意識されている点である。ここを素直に読み取ると、仏僧として世俗との断絶のみを目的として俗塵の払底に言及した、という単純な理解が難しいからである。そして第二には、詠詩に付随する効用としての俗塵の払底が、『万葉集』解説とどのように関わるのかという点である。

思うに、『万葉代匠記』惣釈の次の一節は、上記の二つの疑念を解くための手がかりが残されており、そこから契沖の万葉観とも呼ぶべきものを引き寄せることができる。

哥は此国の詩なり。〔中略〕詩のをしへのごとく哥をも用ゆべし。『詩』すでに五経の中の随一なれば、『詩』の天下に用あることおほきなり。此集〔引用者補：『万葉集』〕をば此国にては、『詩経』に准ずべし。いはんや詩は唐虞に起り、哥は神代にはじまる。久近はるかにへだたれり。三十一字は陽数にして、上下二句に天地陰陽君臣夫婦等の義こもるべし。
(『万葉代匠記』惣釈 1/216-217)

ここで興味深いのは、『万葉集』を「此国にては『詩経』に准ずべし」と説く点である。この直前に、「哥は此国の詩」「詩のをしへのごとく哥をも用ゆべし」とあるのは、先述のように、中世以来の漢詩和歌同質論を契沖がそのまま踏襲していたからであろう。つまり、契沖は漢詩和歌同質論を『万葉集』蒐集歌へと適用させる形で『万葉集』の性格を理解していたと見て良い。ところが、『万葉集』自体の捉え方については、中世堂上歌学と決定的な違いがある。『万葉集』解説は、平安期に宮中で行われた評点作業にまで遡及することが可能であり¹³、また、契沖に先立つ本格的な『万葉集』注釈書としては、鎌倉期の仙覚『万葉集註釈』が抄釈としてある。ところが、中世歌学での『万葉集』の位置付けは、「かなもなかりし世のえびす歌」、そして、「いやしき民の言葉をもひろひあつめたる物」であって¹⁴、このため、これらの訓釈あるいは注解の周辺には、『万葉集』を『毛詩』に準じた歌集と明確に認めた言及は見られない。したがって、中世以来の漢詩和歌同質論に立脚しつつも、中世以来の『万葉集』観とは異なる契沖の『万葉集』への眼差しをこの一句に読み取ることができる。それがつまり、本朝における現存最古の歌集である『万葉集』と唐土における五経の一である『毛詩』の両文献を対置させ、前者の性格を後者のそれに明確に準えたということである¹⁵。

そして、次に注目したいのは、「『詩』の天下に用あることおほきなり」と説き、『詩』に備わ

る「用」に言及している点である。先述のように、『万葉集』を『毛詩』に比擬し、かつ「詩のをしへのごとく哥をも用ゆべし」と主張している以上、『毛詩』に備わる「用」が『万葉集』にもまた備わっている、と契沖が考えていたと推察できるからである。では、『万葉集』の「用」として、何が契沖の念頭にあったのであろうか。これを捉えるためには、彼が何を『毛詩』の「用」と見做していたのかが問題となる。惣釈には、数種の漢籍からの抜き書きが以下のように引用されており、ここより、契沖の『毛詩』観を窺い知ることができる。

『論語』に云ふ、「陳亢¹⁶ 伯魚に問ひて曰く」と。又た云ふ、「子曰く、「小子何ぞ詩を学ぶこと莫きか」と。『礼記』に云ふ、「孔子の曰く、「其の国に入て、其の教へ知ぬ可きなり。其れ人と為りや、溫柔敦厚は詩の教へなり」〔引用者補：経解篇〕と。正義に云ふ、「溫柔敦厚は詩の教へなり」とは、「温」は顔色の温潤を謂ひ、「柔」は情性の和柔を謂ふ。詩 諷諫に依違せば、事情を指切せず。故に尔云ふなり」と。又た曰く、「詩の失は愚なり」「溫柔敦厚にして愚かならざるは、則ち詩に深き者なり」〔引用者補：共に経解篇〕と¹⁷。
(『万葉代匠記』惣釈 1/216)

引文後半の『礼記』は、六経の一としての『詩』を学習することの効用について孔子が述べていく件である。「溫柔敦厚は詩の教へなり」、ここで併せて引かれている孔穎達正義の含意を踏まえると、人間の内心に宿る性情と外面における容貌とを共に柔和にさせることに、契沖は『詩』を学習することの効用を見出したようである¹⁸。また、前半の『論語』からの二つの引文では、『詩』を学習することの重要性が問題となっている¹⁹。ということは、この効用と重要性とが、自身がまさに注釈を施そうとしている『万葉集』にも当てはまり、その読者あるいは学習者を「溫柔」にさせる効用があるがゆえに、『万葉集』には読解及び学習の必要性がある、と契沖が考えていたと言える。

三 「世をおさめ民をみちびく教」

学習者を「溫柔」にさせるという効用、その先には一つの大きな目的が見据えられているように思われる。

和哥の用は詩とおなじ。詩は聖賢をはじめて、代々の人、天下国家をおさむるにも、これを外にせざるよし、かきあらはしいひつたふ。(『万葉代匠記』惣釈 1/217)

ここにおいて、漢詩が安天下成就に不可欠な具であると契沖は明言している。そして、「和哥の用は詩と同じ」とあることから、その機能が和歌にも同様に備わっている、と契沖は言っている訳である。先の引文において、和歌について契沖が「君臣夫婦等の義こもるべし」と説いているのは、この点と関わっている。和歌が人倫に密着していること、また、和歌の隆盛如何が国家の興廃と無関係ではないこと、これらの見方は、古くは『古今和歌集』に確認できる²⁰。ということは、契沖はこれらも概ね是認した上で『万葉集』解説に臨んでいたのである²¹。

では、『万葉集』が安天下成就を担う具であるという踏み込んだ見解に、契沖は果たして達していたのであろうか。いま、『万葉集』編纂意図の探究を目論んだ契沖の思索に注目すると、彼は『万葉集』巻一の冒頭の二首と巻二十の最後の一首の性格を以下のように推察している。

威徳をもて、世をやすらかに、久しくおさめたまひ、雄略ををくり名にもおはせたまへるきみの、かくまで仁愛ふかくよませたまへれば、世はあかれる昔に、人はみかどにましまして、尤一部をくくる徳を具せる哥なるゆへに、撰者これ²²を巻頭にはすべけるなるべし。(『万葉代匠記』巻一 1/271)

此御製²³は、今さへ見奉るものしきやうなれば、子夏が『詩』序に「治れる世の音は、安じて以て樂ぶ。其の政、和すればなり」といへるにもかなひて、又世も遠くして、人も君にましまして、雄略天皇の御歌なくば、かならず此歌第一に載へければ、やがてさしつきて、両帝の御うたをのせて、後の君たる人をしておもはしめたてまつらんとするべし。孔子のごときの聖人も、位なければ、道をこなはれず。これによりて、まづみかどの御歌をつづけて載るなり。(『万葉代匠記』巻一 1/276)

そもそも此集〔引用者補：『万葉集』〕、はじめに雄略・舒明両帝の、民をめぐませたまひ、世のをさまれることを、よろこびおぼしめす哥より次第に載て、今此哥²⁴をもて一部をととのへたることは、此集をすべていはひて、いくひさしくつたはりて、よををさめ民をみちびく、たすけとなれとなるべし。(『万葉代匠記』巻二十 7/444)

『詩』は孔子によって蒐集された。引文に見られる「撰者」、『万葉集』の撰者については古来諸説あるが、契沖は大伴家持撰者説を支持している²⁵。徳高く仁愛に満ちた雄略天皇の歌、天下の安寧を実現した舒明天皇の歌、両歌が『万葉集』の冒頭に配置されたことに、契沖は編纂者である家持の意図を次のように嗅ぎ取っている。— 家持は「後の君たる人」を念頭に置き、安寧を成した施政者の威徳・仁愛と安天下の様態を彼らに教示しようとしたのではないかと。更に、新年瑞祥を祝う歌で『万葉集』が締め括られていることが、後代の施政者による統治と教導の一助たることを期して家持がこの歌集を編纂した何よりの証だ、と契沖は考えている。

『万葉集』一書に政治的性格が付随するという契沖の捉え方は、彼の『万葉集』書題考証においても姿を現している。『万葉集』書題の「万葉」を『古今和歌集』仮名序の「よろづのこのの葉」に基づいて契沖が釈したこと、既に見た通りである。ただし、この書題考証において、契沖がもう一つの解釈の可能性にも言及している点には、意を払う必要がある。

顔延年が「曲水詩序」に「其の天衷に宅りて民極を立つるは、其の道を崇尚し、其の位を神明にし、世を拓きて統を貽し、万葉を固くして量と為さざる者莫きなり」²⁶とかければ、もしは此叙より二字をとり出で、此集万世までにつたはりて、世をおさめ民をみちびく教ともなれと、いはひて名付たるにや。後の勅撰にも、『千載集』となづけられたるこのころなり。仁明天皇、令義解を天下に施行したまふ詔には、「宜しく天下に頒りて、普く画一の訓を遵用して万葉に垂らしむべし」²⁷といひ、斎部広成が『古語拾遺』には、「時に随ひて制を垂れ、万葉の英風を流へ、靡を興し絶を継ぎて、千載の闕典を補ふ」²⁸といへり。此等は此集より後の事なれども、みな万世の心に用たる証なり。(『万葉代匠記』惣釈 1/193)

ここで契沖は、顔延之「曲水詩序」が『万葉集』書題の典拠となっている可能性に言及している。この点を踏まえて、「万葉」が「万世」と解釈できること、そして、その解釈の強度を『古語拾遺』からの引文によって高めている訳である²⁹。この「万世」説は、契沖の創見とは言い難い。『万葉代匠記』とはほぼ同時期に纏められた北村季吟『万葉拾穂抄』においても此説が採用されていることから³⁰、これは徳川前期における有力説であったのであろう。ただし、『万葉代匠記』には「万世までにつたはりて」に引き続いて「世をおさめ民をみちびく教ともなれ」と

更に述べられているものの、これが『万葉拾穂抄』には確認できないという点は注目すべきである。つまり、単に後代までの末永い伝承のみが期されたのではなく、この歌集が安天下を成就させる規範として機能することをも期された上で「万葉」と命名されたのではないか、と契沖の考察はより踏み込んでいるのである。

以上により、契沖は『万葉集』蒐集歌における政治色あるいは規範色を、和歌の必然的性格からだけでなく、撰者による編纂意図にも絡めた二つの方向から固めていったと言える。

四 掘り返される「をしへ」と「ことはり」

万民を啓発して安天下を成就させるための教示の存在を、契沖は『万葉集』一書に嗅ぎ取っている。では、教示の掘り返しは、どのような形で進められ、教示に関わる何が注釈によって明らかにされたのであろうか。

柿本人麻呂が大津京を詠じた歌がある。

玉たすき 畝傍の山の 榎原の ひじりの御代ゆ 生まれましし 神の書はす 樛の木の いやつぎつぎに 天の下 知らしめししを そらにみつ 大和を置きて あをによし なら山を越へいかさまに おぼしめしてか 天離る 夷にはあれど 石走る 淡海の国の さぎなみの 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ すめろぎの 神のみことの 大宮は ここと聞けども 大殿は ここといへども 春草の 茂く生ひたる霞立つ 春日のきれる ももしきの 大宮処 見れば悲しも (『万葉集』巻一 過近江荒都時柿本朝臣人麿作歌 29)

此哥、初には神武天皇よりこのかた代々のみかど、多分やまとに皇居をしめたまふ事をいひ、「そらにみつ」といふよりは、近江へ移りたまひける事をいひ、「すめろぎの神のみことの大宮は」といふより下は、荒廢せることをかなしぶなり。(『万葉代匠記』巻一 1/329)

契沖は此歌を三段に分け、こう評釈している — 冒頭、神武天皇以降、代々の執政の中心であった大和の地より始まり、中盤では、大和から奈良山を抜けた遙か近江大津へと場面が展開する。そして、「すめろぎの」以降、若草の茂りによって往昔の面影を失った旧都の姿を目の当たりにした人麻呂の悲嘆が滔々と溢れ出している — と。

ただし、契沖の注釈を更に立ち入って検討し、仙覚や季吟の注釈と比較すると、人麻呂の悲

嘆を詳細に描出することに終始しているとは思えぬ点がある。それは、「いかさまに おぼしめてか」の二句に対して、「これはすこしそしりたてまつる心か」(『万葉代匠記』巻一 1/330)と、新たな問題提起を行っている点である。契沖は『日本書紀』を引用しつつ³¹、この疑義を巡って以下のような類推を働かせ、此歌への考察を深めている。

これらの心を見るに〔中略〕齊明天皇ののち、御位につかせたまひての六年に、大津宮へうつらせたまふ時、百姓都のうつらむ事をねがはず、いさめたてまつるものも、おほかりけれど、つみにうつらせたまふに、さまさまの童謡ありて、昼夜失火し、よからぬ事どもありけるよし、『日本紀』にみえたれば、ほのめかしていへるにや。しげく都をうつす事は、民のうらむることなり。『史記』殷本紀曰く、「盤庚 河南に渡り、復た成湯の故居に居る。迺ち五たび遷りて、定処無し。殷民咨きて胥ひ皆な怨み、徙らんことを欲せず」³²と。また、ほのめかしても、そしりたてまつるにはあらで、大織冠と御心をひとつにして、蘇我入鹿を殺して、天下を中興したまふ帝にて、はかりがたき叡慮なればいふにや。(『万葉代匠記』巻一 1/330)

最終的には、天智天皇は大化の改新によって天皇親政の道を切り開いたほどの傑物であるから、大津京遷都の際の天智天皇の思惑を人麻呂は付度し難く、それゆえに「いかさまにおぼしめてか」と言ったのかもしれない、という解釈も添えている。しかし、契沖のここでの詳細な思索は、もう一つの解釈の可能性を巡って行われている。天智天皇による大津京遷都直後に民心が動揺したという一つの紀事に契沖は注目し、それを踏まえて、天智天皇への表立った批判をしている訳ではないが、民心離反を招いた天智天皇の大津京遷都が失政であったことを実は「ほのめかしていへる」歌なのではないかと、政治に関わる人麻呂の隠れた思惑を切り出そうと試みているのである。そして、民心離反の理由として、『史記』を引用して殷の盤庚の統治に言及し、「しげく都をうつす事は、民のうらむることなり」と、度重なる遷都が万民の怨情を招くことを明かしている。契沖は此歌の内部から為政に関わる訓誡を引き出しているのである。

また、契沖による教誨の掘り起こしは、別の場面においても確認できる。その例として、山上憶良による「令反感情歌」とそれに関連する諸歌の契沖注解を挙げて見ようと思う。契沖は「令反感情歌」の音訓を次のように開いている。

父母を見れば尊し 妻子見れば 愍し愛し よのなかは かくぞことはり もちとりの かか
らはしもよ 行方知らねば うき履を 脱ぎつるごとく 踏み脱きて 行くちふ人は 石木より
なりてし人か なが名のらさね 天へ行かば ながまにまに 地ならば 大王います この照ら
す 日月の下は 天雲の むかふすきはみ 谷くくの さ渡るきはみ 聞しをす 国のまほらぞ
かにかくに 欲しきまにまに しかにはあらしが (『万葉集』巻五 令反感情歌 804)

ここで気になるのは、冒頭の六句に関する契沖の理解である。沢瀉久孝は此句を「父母を見ると尊い。妻子を見るといとしく、かはゆい。世の中はかうあるが道理である」³³と、語法及び文法に即して訳しており、今日通行している此句の訳も概ねこの通りである³⁴。この場合、「尊し」「愍し愛し」は、父母妻子に接した際に湧き起こる感情として、また、「ことはり」とは、その感情が人間において一般的なものだ、と解されていることになる。では、契沖の場合はどうか。

「よのなかはかくぞことはり」、父母をばたふとびて孝養すべく、妻子をばめぐみうつくしむべく、世上はかくのごとくぞ、道理は有物をなり。(『万葉代匠記』巻五 3/29)

契沖説によると、父母への孝養と妻子への慈愛は当為として捉えられている。だからこそ、「ことはり」は道理、つまり、古今に貫通する規範として解されているのである。契沖説の是非はさて置くとしても、契沖はなぜこのように解釈したのであろうか。此歌の内容について、契沖は「序とあはせてみるべし。始終よくかなへり」(『万葉代匠記』巻五 3/31)と述べており、これが手掛かりとなるであろう。では、問題の序とは何か。

ある人、父母を敬ふことを知れども、侍養を忘れ、妻子を顧みずして、脱履より軽じ、自ら畏俗先生と称す。意気、青雲の上に揚ると雖も、身体猶ほ塵俗の中に在りて、未だ修行得道の聖を験さず。蓋し是れ山沢に亡命するの民。所以に三綱を指示し、更に五教を開き、之を遺るに歌を以てし、其の惑を反さしむ。(『万葉集』巻五 令反感情歌序)

この序によるならば、此歌を憶良が詠じたのは、「三綱」を論じて「五教」を開くことが目的であった、ということになる。契沖はこの点を踏まえ³⁵、あくまでもこの序の内容と整合させる形で歌に託された憶良の思惑に迫ろうとしたために³⁶、「ことわり」を儒学に由来する規範と捉えたのであろう。つまり、父母への孝養と妻子への慈愛という儒学の規範の教示こそが、此歌の中心問題になっていると契沖は解釈しているのである。

このような契沖の理解は、此歌の反歌「ひさかたの あまちは遠し なほなほに 家にかへりて なりをしまさに」(『万葉集』巻五 805)の解釈において、更に顕著なものとなっている。まずは、仙覚と季吟の解釈を押さえておく。

「あまぢ」とは、そらのみち也。「なほなほに」とは、直々といふ也。「なりをしまさに」とは、なりはひをしませと云也。(仙覚『万葉集註釈』巻五)

愚案、「あまちは遠し」とは、彼「あめへゆかばながまにまに」といへる心也。天へゆかばは迂遠也。すなをに世の生業を事としまさねと也。(北村季吟『万葉拾穂抄』巻五)

仙覚注が専ら語釈であるのに対し、季吟注は、此歌が「令反感情歌」の反歌であることを踏まえ、両歌の連関性を意識している。両説を踏まえて此歌を訳すと、「天を志向するのは迂遠であるから、ただ家へ帰って世俗の生業に励めよ」となるであろう。契沖による解釈はどうか。

「ひさかたのあまちは遠し」、「あまぢ」は天路なり。曹子建「呉季重に与ふる書」に云ふ、「天路は高邈にして、良に由縁すること無し」³⁷と。これは「あめへゆかばなかまにまに」といへる心を、ふたたびよみたるなり。天へ昇ほどならば、汝が心にまかすべけれど、「天路高邈」は古人も歎し事なれば、とてもえのぼらじと、初の哥にははたりて、今の哥は教悔の本意をとけり。「なほなほ」は直々歟。猶々にても有べし。「なり」は「産」の字「業」の字なり。「しまさ」はしまさねなり。五音通ぜり。只なをく有のままに、家に立かへりて家業をつとめよと教訓するなり。『孟子』梁恵王篇曰く、「恒産無くして恒心有る者、惟だ士のみ能くすと為す。民の若きは則ち恒産無ければ因りて恒心無し。苟も恒心無ければ、放肆邪侈、為さざる無きのみ」³⁸と。(『万葉代匠記』巻五 3/32)

三者を比較してみると、「なほなほ」について、仙覚の「直々」に対して、契沖は別解「猶々」の可能性を提起しているものの、仙覚・季吟説と明らかに衝突する点はないように思われる。ただし、契沖説に際立っている点がある。それは漢籍からの引証である。上二句の解釈は仙覚や季吟においても問題となっていたが、此所と曹植「呉季重に与ふる書」とを対照したことで、文献に即して歌の含意を固めたことになっている。そして、漢籍からの引証を駆使するという手法が、結果的に此歌に見出された教誨の内実を強固に担保している。この反歌の性格について、「令反感情歌」において込められた「教悔の本意」を明かした歌であると契沖は規定しているが、『孟子』からの引文により、此歌の持つ教誨性 — 家業の励行こそが父母への孝養と妻子への慈愛という規範に適う — が強く押し出されることになっているのである。

「令反感情歌」における契沖の「ことわり」解釈は、別の歌の解釈へも影響を及ぼしている。それは大伴家持によって詠ぜられた「教諭史生尾張少咋歌」の解釈に見出される。もちろん、歌題に「教諭」とある以上、此歌それ自体が教誨に関わるものだという理解は当時概ね得られており、季吟もまた、「史生は官、尾張は氏、少咋は名也。此人さふる子といふ遊君に思ひ付て、故郷の妻を忘たるを、家持卿教訓し給へる哥也」(『万葉拾穂抄』卷十八)と述べている。

大汝 少彦名の 神代より 言ひ継ぎけらし 父母を みればたふとく めごみれば かなしく
めぐし うつせみの 世のことはりと かく様に 言ひけるものを [以下略] (『万葉集』卷十八教諭史生尾張少咋歌 4130)

「父母をみればたふとくめごみればかなしくめぐし」、これは第五に、山上憶良「令反感情歌」に、「ちちははをみればたふとし、めごみればめぐしうつくし、よのなかはかくぞことわり」と、よみ出されたるにおなじ。(『万葉代匠記』卷十八 7/79)

いま、「父母を」以下四句は先述の憶良による「令反感情歌」の類似句と同義である、と契沖は考えている。ということは、ここにおいても、「たふとく」「かなしく」は親族に接した人間が抱く自然の情なのではなく、あくまでも世間の貧富貴賤に貫通する規範として解されているということである。此歌の場合、長歌に先んじて「詔書云愍賜義夫節婦」の一文がある。これに対して、契沖は「元明紀、和銅七年六月二十八日、大赦詔書に云ふ、「孝子・順孫・義夫・節婦其の門閭に表して、終身事ふること勿れ」と。『令義解』第三に云ふ、「凡そ孝子・順孫・義夫・

節婦、志・行の国郡に聞こゆる者、太政官に申して奏聞し、其の門閭に表す」と。『万葉代匠記』卷十八(7/77)と、『日本書紀』『令義解』を引用することで、詔の實在の引証としている。つまり、父母への孝養と妻子への慈愛という儒学に由来する規範とそれを励行する政治制度の實在を契沖は歌の後背に捉えており、ここからの逸脱への教誨という点で両歌は通じ、憶良は「令反感情歌」で家業への専念を、そして、家持は「教諭史生尾張少咋歌」で妻への回帰を教え諭していると彼は解釈したのである³⁹。

おわりに

契沖の『万葉集』注釈事業着手に関わる経緯はさて置くとしても、当時において既に難解であった『万葉集』⁴⁰を全巻に涉って読み解く意義について、契沖は俗塵の私底とともにもう一つの論を用意している。『万葉集』の読解に五経の一つである『毛詩』と同様の学習効用と学習重要性があるという論である。これは、『万葉集』を『毛詩』に明確に準えたことに因むものである。つまり、中世歌学において醸成された為政の用としての和歌という見方を踏まえた上で、中世においては価値が十分に認知されなかった『万葉集』にもそれを適用させていくことで、解読意義を立ち上げたということである。『万葉集』編纂者と契沖が見做した大伴家持の蒐集意図に政治色を見出したことは、その一つの現れであり、また、蒐集歌自体に込められた教導の趣きが、注釈において時に問題となる場面があった。「令反感情歌」と「教諭史生尾張少咋歌」においては、漢籍からの引証によって、「ことほり」なるものの内実が明確化され、また、『日本書紀』などの和文献からの引証により、かの「ことほり」の励行が歴史的事実として上古に存在したこと、そして、それらに背馳した者に向けての「をしへ」の念が込められた歌が時として詠じられたこと、以上が明らかにされている。

では、契沖の思想めいたものは注釈のどこに潜んでいるのか。最後に、その所在を探るもう一つの小考を付して、本論考を結びたい。一つの特異な風潮が日本には確認できる、と契沖は語っている。

此国は色をこのめり。〔中略〕およそ此国にはなさけといふことをたふとべり。性情につきていはば、むつかしかりなん。なさけをたふとぶといふゆへは、延喜式をみるに、二月積奠の日、もし神事にあたれば、三牲をかふるに鯉鮒のたぐひをもてす⁴¹。これは異国にた

がひて四足をいまるるゆへなり。大嘗会のまへなどには、僧尼のごとき、情を奪て公に随ふ輩を、禁裏に出入せしめざれといへり⁴²。仏制の公道に随ふ故に、崇敬したまへども、人情をすてて俗を出、すけなきやうなるか、神事にかなはざれば、僧尼の出入をゆるさず。

(『万葉代匠記』卷三 2/116)

特異な風潮、契沖はそれが「なさけ」の重視だと考え、その根拠として『延喜式』を挙げている。俗情を捨てた仏教者が尊崇の対象となっていたことを契沖は否定しない。しかし、俗情を捨てたが故に彼らが排除される場面が王朝世界にはあったことを、彼は制度の存在を媒介に歴史的事実として把握している訳である。そして、この「なさけ」の重視が、日本において色情を過度に嗜好する傾向と連関していると契沖は理解しているのである。

契沖には儒学の素養はあるものの、儒学者ではない。ここから、唐土の聖人による道に彼は執着せずに寛容であったという見方はできる。しかし、既に言及したように、彼は真言宗の仏者であって、厳守すべき戒律はある。このため、規範あるいは道理を等閑にしたとは考えにくい。彼が上古における事実として捉えた儒学に因む規範の励行と「なさけ」に起因する情事の嗜好、両者の相剋について契沖が出した解答はこうである。

もろこしのただしき聖の道などはしばらくをきぬ。此国には聖君賢臣ときこゆるも、すこし色をばこのまれけるなり。されど古公の時、「内に怨女なく、外に曠夫なし」といふがごとく、身をつみて人のうへにもよぼしたまひければ、はかなきことのあはれにもやさしくもきこゆる事おほし。(『万葉代匠記』卷一 1/299-300)

これは、中大兄皇子が畝傍山・香具山・耳梨山の三山を詠んだ歌⁴³への契沖の注釈である。神代において、女山である香具山と耳梨山とは雄々しき畝傍山を巡って争った、という。そこから、妻を争うことは今の世においてもやはりあることよ、と詠じている。契沖はここで、本朝においては聖人や賢者さえもが好色を嗜む風潮にある、と言う。唐土における聖人の道の正格、その内実がここでは具体的に示されていないものの、「ただしき聖の道などはしばらくおきぬ」とわざわざ言う以上、好色が聖人の道の正格から逸脱した行為であることを契沖は十分承知していたのであろう。その上で契沖は「内に怨女なく、外に曠夫なし」と、『孟子』に言及し

ている。引用された『孟子』の前後の文脈はこうである。

王曰く、「寡人に疾有り、寡人色を好む」と。對へて曰く、「昔者、大王色を好み、厥の妃を愛す。『詩』に云ふ、「古公亶甫、來りて朝に馬を走らせ、西水の澗に率ひて、岐の下に至る。爰に姜女と、聿に來りて宇を胥る」と。是の時に當りてや、内に怨女無く、外に曠夫無し。王もし色を好むも、百姓と之を共にせば、王において何ぞ有らん。」(『孟子』梁惠王篇下)

自身の好色が施政の妨げとなることを嘆く梁の惠王に対し、孟子は周の古公亶父の治世に言及する。古公亶父は、周の文王の祖父。— 施政者の好色は、万民と共に行う覚悟で臨むのであれば、それによって万民が感化され、結果的に領邦を安寧へと導くので問題はない — 引文はこのように孟子が説く件である。ということは、この引文によって、色事が聖人の道の正格ではないとはいえ、施政者の好色が安天下の一助となり得ることを引証し、更にそこから派生して、道理を弁えた聖君や賢臣による男女の恋仲であるからこそ、聖人の道の破格である色事においても情緒や優美といった感興が生じる、と屈折した見解⁴⁴が説かれているのである⁴⁵。

以上に基づいた場合、『万葉代匠記』における契沖の思想の所在について、一つの推論を立てることができる。『万葉集』の随所に見られる聖君や賢臣による男女の恋仲を、道理ないし規範と色事に代表される情誼との具体的な交点として契沖が捉えていたのではないか、という推論である。道の正格が揺らぎながらも斯道と無関係ではない色事をどのように解するのか、その捉え方には、解釈者の個性が多分に反映される余地がある。それゆえに、儒学の素養を持ちつつも「なさけ」にも配慮する仏教者としての契沖⁴⁶の個性的な人間観とも言える見解が投影されている可能性が高いのではないか、ということである。聖賢の慕情が詠じられた『万葉集』菟集歌において、契沖はそれらの情事の中に人間のいかなる姿を捉えたのか、そして、その人間観はどのような様相を呈しているのか、それらは本論を超えた論題であり、別稿で改めて論ずる必要がある。

¹ 本居宣長『玉勝間』巻八「古学を、儒の古文辞家の言にさそはれていできたる物なりといへるは、ひがごと也。わが古学は、契沖はやくそのはしをひらけり。かの儒の古学といふことの始めなる、伊藤氏など、契沖と大かた同じころといふうちに、契沖はいささか先だち、かれはおくれたり。荻生氏は、又おくれたり。いかでかかれにならへることあらむ」。

² 本居宣長『玉勝間』巻二に、「おのがわかくて、京にありしころなどまでは、『代匠記』といふ物のあることをだにしろる人も、をさをさなかりければ、其書世にまれにして、いといとえがたく、かの人の書は、百人一首の『改観抄』だに、えがたかりし」と。また、同『排蘆小船』に、「著述多ケレドモ、梓行セザレバ世ニ知ル人マレナリ。オシイカナ」と。

³ 例えば、『万葉代匠記』『勢語臆断』『源注拾遺』『古今余材抄』など。

⁴ 芳賀矢一『日本文献学』（富山房、1928年）、p.4 及び pp.32-33。

⁵ 久松潜一『契沖伝』「従来の先達中心主義や伝授崇拜を破壊して文献的態度方法を用いた所に方法論の革新があり、また新しい研究の結果を得たのである。もとより誤も少からずあるが、これを契沖以前及びその同時代のいづれに比しても遥かに卓出して居り、以降の著述に対してもなほ十分対抗するに足る。殊に万葉代匠記の如き、万葉研究史上に於いてその卓説に富む点に於いて、文献的な点に於いて、精細なる点に於いて、はたその異本校訂に水戸の秘本を用いた点に於いて、いづれの書も匹敵する事はできない。万葉考〔引用者補：賀茂真淵の作〕の如き、万葉集古義〔引用者補：鹿持雅澄の作〕の如き、次第に学説も進みかつ集大成されてきたが、一個の研究として見る時には、契沖に比して遜色あることを覚える」（『久松潜一著作集』第12巻、至文堂、1969年、pp.463-464）。

⁶ 前掲久松潜一『契沖伝』「契沖は古文献によるといふ以外に真淵・宣長・篤胤の如き主張がなかつたために、保守派の澄月・慈延等から反対を受けた以外に、新学派からは何等の反対もなかつたのである」（p.464）。

⁷ 宣長と契沖との関連性については斯界で承認されているものの、契沖の思想が研究対象とはならなかったのは、思想信条を声高に説いた文献が契沖に少ないことと無関係ではない。また、久松氏が指摘するように、『万葉集』研究の進展により、契沖の注解には今日では誤りとされる説も多々ある。そうした説は、往々にして『万葉集』研究では見るべき価値無しとして、その後に顧みられることはない。この扱いは、契沖の古典注釈学の特質と価値が客観中立的態度で書かれた点にあると長く考えられてきたことを表している。

⁸ 『万葉代匠記』は、初稿本と精撰本との二系統に大別できる。初稿本が彰考館に提出されたとき、①『万葉集』諸本の校合が不十分で不備があること、②解釈の多くが中立的な正義としては穏当ではないこと、などの理由により、彰考館より改稿を求められたという経緯がある。つまり、初稿本は諸本校勘を経ていないという意味において未熟さがあるものの、精撰本では削り取られた契沖の個性的な解釈と考証とを多く残している。本論考では、後者の利点を重視し、初稿本を主要分析対象とする。このため、諸本校勘に基づく修訂によって成立する精撰本での契沖の思想変化については、別途論じる必要がある。

⁹ 『万葉代匠記』惣釈「もろこしには初につきて詩となづけ、此国には後につきて歌となづくと、かなたにもまた哥といへば、おなじことなり」（1/216-217）。

¹⁰ 賀茂真淵『歌意考』「遠つ神、あがすめらぎの、おほみ継継、かぎりなく、千いほ代をしろしをすあまりには、言佐敵ぐから、日の入国人の心・ことばしも、こきまぜに來まじはりつつ、ものさはにのみ、なりもてゆければ、ここになほかりつる人の心も、くま出る風のよこしまにわたり、いふ言の葉も、ちまたの塵のみだゆきて数しらず、くさぐさになむなりにたる。故いと末の世となりては、歌の心・ことばも、つねのこころ・言ばしも、異なるものとなりて、歌としいへば、しかるべき心をまげ、言葉をもとめとり、

ふりぬる跡をおひて、わがこころを心ともせず、よむなりけり」。

¹¹ 契沖「上水戸源相公万葉代匠記序」。

¹² 『万葉代匠記』起筆に至る経緯については、池田利夫「契沖注釈書の生成」(『契沖研究』、岩波書店、1984年、pp.1-110)。

¹³ 由阿『詞林采葉抄』卷十「天曆御宇、詔大中原能宣・清原元輔・坂上望城・源順・紀時文等、於昭陽舎、加和点、此号古点。〔中略〕法成寺入道関白太政大臣・大江佐国・藤原孝言・権中納言匡房・源国信・大納言源師頼・藤原基俊等、各加点、此名次点」。

¹⁴ 一条兼良『小夜寝覚』「三代集の中だに、いまだあきらめざる事は多く侍り。まして『日本紀』『万葉集』などは、いまだかなもなかりし世のえびす歌、国々の境談とていやしき民の言葉をもひろひあつめたる物なれば、読みとく事だにもかたかりしを、顕昭といひし人、『日本紀』の神代より歌の心をかきあらはし、仙覚といひしもの、『万葉集』のむねをえて、三百餘首、順〔引用者補：源順〕などだにも読とかざる点を加へ侍り」。

¹⁵ 『万葉集』と『詩経』を対峙させ、両文献の体裁を較べたのが、後の賀茂真淵である。賀茂真淵『万葉考別記』卷一 卷のついで「其一二〔引用者補：『万葉集』卷一卷二〕には古き大宮風にして、時代も歌主もしるきをあげ、三には同じ宮風ながら、とき代も歌ぬしもしられぬ長歌を挙、四五には同じ宮ぶりにして、代もぬしも知られぬ短歌を挙、六には古き東歌を挙て巻を結びたるなるべし。から国の古へ歌は、国風を始めとしたり。ここには宮ぶりを先にて、国ぶりを末とせしものと見ゆ」。

¹⁶ 「宄」、初稿本は「元」と作る。『論語』諸本に従って改める。

¹⁷ 『論語』『礼記』の訓読は清原宣賢訓点に従った(いずれも京都大学付属図書館清家文庫蔵)。

¹⁸ 契沖はこの「溫柔敦厚」を、『毛詩』一経を超えた、より大きな枠組みの中で捉えている。『万葉代匠記』惣釈に、「倭、鳥禾切、和の字と同じきがゆへに、通じて和を用ゆ。倭の又の音、於鳥切。『説文』云、「順兒」〔引用者補：八篇上 人部〕。わとおと五音通じて義もまた和に通ぜり。〔中略〕本朝はすでに、和をもて名とすればいふにをよばず、三教もまた柔和をたとふ。此故に儒柔也。そのをしふるところ知ぬべし」(1/216)と。契沖の見解を整理すると、以下のようになるであろう。—『広韻』を紐解くと、下平声の項に「東海中国、鳥禾切」と見え、「和」は去声として「声相応、胡臥切、又音禾」と見える。つまり、上古における本朝の国号であった「倭」は、音通による仮借によって、「和」字が当てられることがある。また、『説文解字』によると、「順兒」とあり、「倭」は人と委とを構成要素とし、「委声」であるという。よって、「倭」と「和」は音義の両面において通じている — と。ここから、かつて倭と呼ばれた本朝では和順が尊重され、それと同時に、儒道仏の三教における教義において尊ばれたのも柔和である、と契沖が説くからである。

¹⁹ 『論語』季氏篇「陳亢問於伯魚曰、「子亦有異聞乎」。対曰、「未也。嘗独立、鯉趨而過庭。曰、「学詩乎」。対曰、「未也」。不学詩、無以言」。鯉退而学詩。他日又独立、鯉趨而過庭。曰、「学礼乎」。対曰、「未也」。不学礼、無以立」。鯉退而学礼。聞斯二者」。陳亢退而喜曰、「問一得三、聞詩、聞礼、又聞君子之遠其子也」。『論語』陽貨篇「子曰、「小子。何莫学夫詩。詩、可以興、可以觀、可以群、可以怨。邇之事父、遠之事君」。

²⁰ 『古今和歌集』真名序「動天地、感鬼神、化人倫、和夫婦、莫宜於和哥」。

²¹ 契沖『古今余材抄』第一 両序「家より国にをよび、国より天が下にいたるまで、用をなすことすくなからず。世のさかえおとろふるも哥とともなり。此哥は神のはじめたまへる道にて、我朝におきては双ひなき事なり」(8/7)、また、『万葉代匠記』惣釈「和哥は浅深を兼ね、上は神明仏陀にも通じ、下は凡民までを

教ふ。天下の治乱と和哥の興廢、ともに運をひとしうすと見えたり」。

²² 『万葉集』卷一 天皇御製歌1「籠もよみ籠持ち 掘串もよみ掘串持ち 此の岳に 菜採むす兒 家聞かむ 名告げさね そらみつ 大和の国は おしなべて 吾こそ居らし 告げなべて 吾こそ座らし 我こそは 背には 告げめ 家をも名をも」。

²³ 『万葉集』卷一 天皇登香具山望国之時御製歌2「大和には 村山有れど 取りよろふ 天の香具山 騰り立ち 国見を為れば 国原は 煙立籠め 海原は かまめ立ちたつ おもしろき 国ぞ あきつ島 大和の国は」。

²⁴ 『万葉集』卷二十 三年春正月一日於因幡国庁賜饗国郡司等之宴歌 4540「新しき 年の始めの 初春の 今日降る雪の いやしけよこと」。

²⁵ 『万葉代匠記』惣釈に、「此集の撰者、ならびに時代の事、昔より説々ありて一定せず。されども、一同に勅撰とはさだむる歟。今此集の前後を見て、ひそかにこれをおもふに、中納言大伴家持卿、若年より古記、類聚歌林、家々の集まで、残らずこれを見て撰び取、そのほかむかしの歌、見聞にしたがひあるひは、人に尋とひて、漸々にこれを記し集て、天平宝字三年までしるされたるが、そののちとかくまぎれて、部類もよくとのへられぬ草本のままにて、世につたはりけるなり」(1/195)、また、「集をよく見ん人は、家持が私に撰すといふこと、みづから信ずべし」(1/199)と。

²⁶ 顔延之「三月三日曲水詩序」(『文選』卷四十六)「夫方策既載、皇王之迹已殊。鐘石畢陳、舞詠之情不一。雖淵流遂往、詳略異聞、然其宅天衷、立民極、莫不崇尚其道、神明其位、拓世貽統、固万葉而為量者也。李善注「東京賦」曰、「豈如宅中而凶大」。『呂氏春秋』曰、「古之王者、擇天之中而立国、択国之中而立宮」。『周礼』曰、「設官分職、以為民極」。『周易』曰、「聖人以神明其德」。

²⁷ 『続日本後紀』卷第三 承和元年「宜頒天下、普使遵用画一之訓垂於万葉」。『万葉代匠記』に「用」字なし。『続日本後紀』諸本に従って改める。

²⁸ 斎部広成『古語拾遺』跋。

²⁹ 精撰本『万葉代匠記』惣釈 雑説「此書〔引用者補：『万葉集』〕ヲ証スルニハ、此書ヨリ先ノ書ヲ以スベシ。然レドモ日本紀ナドノ二三部ヨリ外ニナケレバ為ム方ナシ。次ニハ『続日本紀』『古語拾遺』『懷風藻』『菅家万葉集』『和名集』等ナリ。『類聚国史』ハ世ニ稀ナル書ニテ、見ザレハ如何セム。後ノ先達ノ勘文注解ノミニ依ラバ、此集ノ本意ニアラザル事多カルベシ。意ヲ得テ撰ビ取ベシ」(1/160-161)。

³⁰ 北村季吟『万葉拾穂抄』此集第号之事「愚案、「万葉」といふ字は『文選』顔延年の「三月三日曲水詩序」に「招世貽統、固万葉」とあり。済注云、「葉は代也」。養老の令に「詔垂萬葉」といへり。義解云、「毛萋『詩』伝曰、「葉、世也」。しかれば、萬葉集はよろづよに伝る集といはへる心なるべし。後白河院御宇に俊成卿撰び給へる『千載集』の名義似たる心あるなるべし」。

³¹ 『日本書紀』卷二十七 天智天皇六年「三月辛酉朔己卯、遷都于近江。是時、天下百姓、不願遷都、諷諫者多。童謡亦衆。日々夜々、失火処多」。

³² 訓読は裴駰集解に基づく。「孔安国曰、「胥」、相也。民不欲徙、皆咨嗟憂愁、相与怨其上也」。

³³ 沢瀉久孝『万葉集注釈』第5卷(中央公論社、1959年)、p.37。

³⁴ その一例として、岩波新日本古典文学大系所収本に示された訳解を挙げる。「父母を見れば尊い、妻と子を見ればいとしくかわいい、人の世はそれが当たり前だ」(『万葉集一』、岩波書店、1999年、p.449)。

³⁵ 精撰本『万葉代匠記』卷五「三綱ハ、君ハ臣ノ綱為リ、父ハ子ノ綱為リ、夫ハ婦ノ綱為リ。〔中略〕五教ハ、父義、母慈、兄友、弟恭、子孝」(3/25)。

³⁶ 契沖は、序には作者の思惑が述べられていると考えており、それを孔安国「尚書序」によって補強している(『万葉代匠記』卷五 3/31)。序に即した解釈はこれに因むのであろう。

³⁷ 曹子建「与呉季重書」(『文選』卷四十二)「日不我与、曜靈急節、面有逸量之速、別有參商之闊。思欲抑六龍之首、頓羲和之轡、折若木之華、閉濛汜之谷。天路高邈、良久無緣、懷恋反側、如何如何」。李善注「仲長子昌言曰、「蕩蕩乎、若昇天路而不知夫所登也」。

³⁸ 『孟子』梁惠王篇上「無恒産而有恒心者、惟士爲能。若民則無恒産固無恒心。苟爲恒心、放辟邪侈、無不爲已」。『万葉代匠記』、「因」を「固」、「無恒心」を「爲恒心」と作る。『孟子』諸本に従って改める。

³⁹ 両歌を関連付けて捉える傾向は、反歌の一つである「あをによし 奈良にある妹が たかたかに まつらむ心 しかにはあらじが」(『万葉集』卷十八教諭史生尾張少昨歌反歌 4131) に対して、契沖は後の精撰本において「落句ハ憶良ノ「令反感情長哥」ノ終ト同ジ」(7/80) と述べている点にも反映されている。

⁴⁰ 注14を参照のこと。

⁴¹ 『延喜式』卷二十 大学寮「凡享日、在園・韓神并春日・大原野等祭之前、及与祭日相当、停用三牲及菟、代之以魚。其魚、每府令進五寸以上鯉鮒之類五十隻鮮潔者」。

⁴² 『延喜式』卷三 神祇三「凡祈年・賀茂・月次・神嘗・新嘗等祭前後散齋之日、僧尼及重服奪情從公之輩、不得參入内裏。雖輕服人、致齋忸散齋之日、不得參入。自余諸祭齋日、皆同此例」。

⁴³ 『万葉集』卷一 中大兄皇子近江宮御宇天皇三山歌 13「高山は 畝傍雄をしと 耳梨と 相ひあらそひき 神代より かかるにあらし 古昔も 然にあれこそ 虚蟬も 孀も 相ひうつらしき」。

⁴⁴ 契沖は好色を全面的に肯定している訳ではない。世上の多くの男女の恋仲にも、聖君や賢臣の好色に似た叙情を伴うことがあるものの、過度の好色が身を滅ぼす、とは考えている。そして、三山の争いに託つけた過剰な好色への教諭の存在を契沖は此歌の後背に嗅ぎ取っており、彼が蒐集歌に教導が時として存在することを意識していた傍証の一つとなる。『万葉代匠記』卷一「そのほか、よのつねのおとこ女のなさけも、俊成卿の、「こひせずは人は心のなからまし物のあはれはこれよりぞしる」〔引用者補：藤原俊成『長秋詠藻』卷二〕と、よみたまひけんやうに、おかしうきこゆる昔物かたりもあれど、あまりに入たちぬれば、人をも身をもそこなふ、むくつけき事さへ出来るものなるゆへに、三山のあらそひにことつけて、いましめをのこしたまふなるべし」(1/300)。

⁴⁵ 吉川幸次郎は、「物部の 八十字治河の 網代木に いざよふ浪の 行方知らずも」(『万葉集』卷一 8) という柿本人麻呂の歌の契沖注解に『論語』子罕篇「子在川上曰、「逝者如斯夫、不舍昼夜」が引用されていた点に着目し、逝川の嘆きに無常観を見た契沖の漢学に関する素養の深さに言及している。『万葉集』解釈に際して、漢籍からの引文が単なる出典確認以上の意味を有していたことを氏は示唆しているのである(吉川幸次郎『読書の学』、筑摩書房、2007年、pp.245-273)。

⁴⁶ 精撰本『万葉代匠記惣釈』雑説「神道ハ仏法ニモ儒道ニモ替レル処アル歟。『日本紀』等ヲ披キ見テ知ベシ。然モ応神天皇ノ御世ニ儒教来リ、欽明天皇ノ御世ニ仏道到レリ。其後王臣共ニ是ヲ相兼用テ世ヲ治タマヘバ、反キテ叶フ故アルヘシ。哥ヲ見ム人ハ、神道ヲ本トシテ儒仏ヲ兼テ取捨セヌ心アルベシ」(1/161-162)。

* 契沖『万葉代匠記』からの引用は、全て初稿本に拠る(注8を参照のこと)。初稿本は賀茂別雷神社三手文庫蔵今井似閑本を底本とした岩波書店『契沖全集』所収本を用い、引文の末尾に全集該当頁を記した(例えば、『契沖全集』第6巻238頁からの引用の場合、6/238)。

* 『万葉集』蒐集歌からの引用については、本論考での問題関心に従い、『万葉代匠記』初稿本執筆の際に契沖が参照したとされる寛永刊本に基づき、契沖の音訓に従って万葉仮名を開いて表記している。このため、今日の万葉研究において通行する音訓とは異なる場合がある。なお、参照の便宜上、西本願寺本を

底本とする『新編国歌大観』(角川書店、1984年)での対応歌収録番号を算用数字で記している。

* 引文の表記について。読者の便宜を考慮し、旧字体は常用字体に、踊り字は仮名に開いて表記し、仮名には適宜濁点を補っている。更に、引文中の書名には鍵括弧、引用には括弧を、また、必要に応じて句読点の増補修訂を行っている。漢文史料からの引用については、現代語訳あるいは訓読とともに原文を併記すべきではあるが、紙幅の都合上、本文での引用については訓読のみとし、原文は割愛した。

Digging out Precepts from *Manyōshū* Clue for Considering Keichū's Thought in His Commentary on *Manyōshū*

Tomohiro YAMAGUCHI

Through the analysis of *Manyōdaisyōki* 『万葉代匠記』, the commentary on *Manyōshū* 『万葉集』, this article considers an aspect of the studies of Keichū 契沖 (1640-1701), one of the most famous scholars of Japanese classical culture during the early Tokugawa period.

Section 1 of the article explores Keichū's views on Japanese poetry, which he thought was a response to feelings aroused by innumerable events. And on this count, exclusively influenced by medieval poetics in Japan, he insisted that Japanese poetry resembled Chinese poetry. Through analysis of the *Manyōdaisyōki* introduction, Section 2 elucidates the originality of Keichū's views of *Manyōshū*, summarized into two major points: First, Keichū thought that *Manyōshū* was comparable to *Shi jing* 『詩經』, one of the classical Chinese texts. Second, he believed that *Manyōshū* had the same effect as *Shi jing*, that is, making each reader gentle. Section 3 delves into this issue in greater detail, clarifying that Keichū regarded *Manyōshū* as politically useful. Section 4 examines some of Keichū's commentaries on *Manyōshū* to consider their characteristics: Because his study of historical documents and classical Chinese texts enables him to gain a clear, detailed understanding of these poems, he found that they expressed standards and reason.

This article's analysis derives the following conclusion. A major characteristic of Keichū's commentary on *Manyōshū* was digging out its precepts. Furthermore, from this study, I deduce that Keichū's commentary on the love poems of the nobles who understood the norm of Confucianism's standards contained his notions about human beings.